



江藤淳

海は甦える

第一部

海は甦える

第一部

江藤淳

海は甦える 第一部

一九七六年一月二十五日第一刷
一九八五年三月二十五日第二十一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 江藤淳

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷所 精興社

製本所 矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替いたします

海は甦える 第一部

著者自装

長崎では舗道の下に海が睡っている。

明治中期におこなわれた大規模な埋立て工事の結果、旧い海が土砂で埋まり、街路に変わってしまったからである。

《出島の島——懐しい古い出島、オランダ人が長い年月そこで貿易を行い、夢を抱いていた所——その出島はこの湾の少し先の方に横たわり、遠方から見ると、長崎の前にある小さなとりでか胸墻のように見える》（『江戸と北京』）

と、ロバート・フォークンが描いている出島は、いまではすっかり市街地のなかに埋没して、長崎に入港するどんな船の上からも見ることができない。オランダ商館長たちが、望郷の想いをいだいて眺めた海のなごりをとどめるものとしては、一条の黒くよどんだ運河があるだけである。そして、かつてこの人工の島を市街からへだてていた運河は、すでに跡かたもなくなっている。

一八六〇年（万延元年）に上海から長崎にやって来た英国の宣教師、ジョージ・スミスは、肥前佐賀藩邸の威容を、

《堂々たる堅固な塀、海に面した岸壁、海に降りて行く石段、それから海に面した小綺麗な広い庭、その外にはとくに堂々たる外観を持つ所の建物はない》（『日本における十週間』）

と記した。その「堅固な塀」も、「岸壁」も、「広い庭」もいはない。それよりもまず「海」がない。以前海だったところに国鉄の長崎駅が建ち、佐賀藩邸の跡は交通産業会館になって、このターミナルに発着するバスが、波の変容した灰色の道路にひしめく車をかきわけながら、数分置きに出たりはいったりしている。

スミスが、「独立君主の権威と威厳を享受している」（同上）と評した旧薩摩藩邸は、現在では東京銀行長崎支店である。坂本竜馬の海援隊が策源地にした土佐商会の跡には、そのことを記した一本の杙くが立っているにすぎず、それさえも雑沓にまぎれてほとんど目につかない。

このように長崎の港は、昔日の面影をとどめぬまでに陸と人ともに侵蝕されている。それはすでにかつての商業港ですらない。昭和四十七年十月現在、二十万トンから三十万トンに達する巨大なタンカーを、次々と進水させている産業港である。三菱長崎造船所を主軸にして、造船産業の地にすっかり変えられてしまった港と街——それが今日の長崎である。

しかし、それでもなお、西役所跡——現在の長崎県庁の所在地——に立って港をのぞむと、睡っている海がひたひたと足元におしよせて来るように感じられる。国鉄の駅も、自動車の群も、バスも、歩道橋も、人混みもまたたく間に消え失せて、塗りこめられたアスファルトの舗道のあいだから往年の大波止おおはとがあらわれ、それが雄渾な波に洗われているありさまが眼に映じる。

これこそ長崎港の原点である。今では県庁下手の横断歩道の下に、ひっそりと身をひそめているかつての大波止のあたりから、海が息づき、よみがえり、泡立ちはじめる。

それは一五七一年（元龜二年）、長崎が開港されるのと同時に築かれた波止場だ。伊東ドン・マンショ、千々石^{ちぢわ}ドン・ミゲル、原ドン・マルチーノ、中浦ドン・ジュリアンの四人の天正の少年使節を乗せたバツティラは、ここから漕ぎ出して沖がかりしているポルトガル船に向った。往復八年の歳月をついやした欧州への大航海の輝かしい第一歩がしるされ、また最後の重い一步が刻されたのはこの場所である。

またここから長崎の市民は、来航していたポルトガル船にかわってオランダ船が到着しはじめるのを見、出島の住人だったポルトガル人が追放されて、平戸から移って来たオランダ人に交替するのを眺めた。一六四一年（寛永十八年）夏のことであった。

一八〇四年（文化元年）の秋、露帝アレクサンドル一世の特派大使ニコライ・ペトロヴィッチ・レザノフを乗せたナデジュダ号が神の島の前に投錨したとき、検問の船はこの大波止から露船に急行した。ナデジュダ号に乗っていた士官イヴァン・フィヨードロヴィッチ・クルーゼンシュテルンは、長崎港についてきわめて正確な記事をのこしている。

《長崎の港は三つの部分に分けることが出来る。というのは、この港はそれぞれ安全な三つの別な碇泊地を持っているということである。その第一は最も外のもので、パーペンベルグの西にある。

第二の中央のものは同じバーペンベルグの東にある。第三の碇泊地は長崎市の前の内部の碇泊地として港の内奥にある。われわれはこれら三つの碇泊地のそれぞれに相当の期間碇泊していたのであるから、この碇泊地のそれぞれについて最も詳しく記しておこう。(中略)

《……この外側の碇泊地すなわちバーペンベルグの西にある碇泊地は、北西風と西北西風を除いて、あらゆる風から完全に保護されている。……その底の土は碇を下すに最も好適である。(中略)

《中央の碇泊地または高鉾島の東方にある碇泊地は、四方を陸地で囲まれ、最も内側の碇泊地と同じように全く安全である。この中央の碇泊地の方が最も内部の碇泊地よりもすぐれていると言えよう。そういうのは、この碇泊地は、外側の碇泊地ほどではないが、内側の碇泊地よりも海底が碇泊に適しているからである。その西がバーペンベルグで、これは周囲半マイルにも足りない小島であるが、港内の諸島の中で最も高い島である。……日本人はこれを高鉾島という。バーペンベルグという名は、日本からキリスト教が追放された当時、カトリック宣教師がこの山から投身したという伝説があり、それから起った名前である》(『世界周航記』)

しかしクルーゼンシュテルンは、長崎港の防衛については、すでに次のように警告していた。

《港の中央の碇泊地から内側の碇泊地または長崎市までは、航路は北東四〇度である。距離は二マイル三分の一、水深は十八尋からだんだん減少して五尋までになる。ちょうどその半分ぐらいの所、水路の広さ四百尋に満たぬ所に、両側に日本の砲台または幕府の番所がある。ここには幾つかの建物が見えるが、しかしここにも大砲は一つもないらしい。同様の砲台もしくは番所は、更に港の両側にたくさんの場所に造られている。事実、この水路の幅は五百尋を越えないし、二三の場所では

わずか三百尋に過ぎない所もあり、もし誰かがこの所に防備を施すことを知っているならば、長崎は実に攻略不可能な要害の地である。しかし現状では、長崎の防備力はヨーロッパでも最も貧弱で辺鄙な漁村と同じ程度である。もしフレガット艦に焼打船数隻を付けるならば、長崎にいかに多くの兵士があつた所で、攻略するに大した時間を要しないであらう。日本人は到底これに抵抗して戦うことはできない》(同上)

果せるかなそれから僅か四年後の一八〇八年(文化五年)旧歴八月十五日、オランダ船をよそおつたサー・イズレール・ベルウの英国フリゲート艦フエートンが長崎港に侵入して来たとき、日本側はオランダ商館員二人を人質にとられて、まったく対応の方策を知らなかった。当時の史料は記録している。

《異人湊内バツティラに乘し、およそ三十人ほど乗組み乗廻し候段、所々より注進矢の如し。海陸騒動いたし候につき、佐賀藏屋敷役人へ吉仲勇藏をもつてバツティラ船召捕り候様、早使をもつて申し達す。(中略)

《一、右時刻異人ども紅毛館(注・オランダ商館)へ押寄せ、水門打碎うちくだき、館内乱妨らんぼうにおよび候につき、かびたんはじめ蘭人のこらず立退き、大通詞中山作三郎警固いたし、御陣屋へまかり越し候につき、(上条)徳右衛門(注・奉行所の役人)門前にて作三郎差図おもていたし、表用部屋へ入れ置く。

《一、異人大波止へ上陸いたし、唯今御門前へ押寄せ候段注進これあり、召捕りのため即刻徳右衛門まかり出ず。(後略)》(『通航一覽』―「長崎秘記」)

しかし、商館長ドーフが重要書類をかかえて奉行所に保護を求めたという以外、この記事に記されたところはすべて虚報である。実際にはフェートン号の端艇は、オランダ船捕獲の目的で湾内を巡航したにすぎず、オランダ船の影が見えないのを知るとそのまま本船に引きかえして、乗組員を上陸させることもなかった。

だが逆にいえば、このような虚報が乱れとぶほどフェートン号侵入の衝撃は大きかったといわなければならぬ。国法を犯した英艦の侵入を阻止できず、あまつさえオランダ商館員二人を人質にとられ、先方のいいなりに薪水と食料品の供給を余儀なくされた責任をとって、長崎奉行松平図書頭康英は、英艦が出航した八月十七日の夜半、凄絶な自刃をとげた。

《天下の御恥辱異国へ顕^{あらわ}われ、申訳なき仕合せに御座候あいだ、御断りのため切腹仕り候》

と、この不運な長崎奉行は書き遺している。このほか警備の任にありながら職務に怠慢のあった佐賀藩主、鍋島肥前守斉直は幕府から閉門を命じられ、責任の衝にあった佐賀藩の重役数名も切腹して罪をわびた。

これは、ヨーロッパにおけるナポレオン戦争の余波が、ついに長崎の大波止にまでおよんだことを示す事件である。当時オランダは、ナポレオン一世治下のフランス帝国の勢力圏にはいり、英国とは敵対関係にあったからである。サー・イズレール・ペルウの率いるフェートン号は、東洋のオランダ植民地の北限にある出島に、いわば果敢な威力偵察を試みたのであった。

果して日本は、今後このまま、国際社会の力の葛藤の外に存立できるだろうか？ ことに鎖国と

いう基本政策の維持が、これ以後も可能でありつつづけるだろうか？ フェートン号事件は、少くともこの二つの根本的な問いを日本人の胸許につきつけていた。しかし人は、答えにくい問いには答えたがらない。むしろ問われなかったことにして済ませてしまいがちなものである。やがて新しい奉行が着任し、鍋島侯の謹慎も解かれ、長崎の市中には昔ながらのゆるやかな年中行事のリズムが戻って来た。

《雪が降るときは、ひらひらと降り、かさかさと音がする。しかも着物にくつつくことがない。満山が宝石のようになると、寒くてたまらない。》

《四季を通じて暖かい。雨は時をさだめない。雨が降ると必ず東風が吹く。詩経に、「其れ雨ふり、其れ雨ふる、杲々として日を出す」とは、このことを詠んだかのようなものである》（汪鵬『袖海編』）

《遊女の住んでいる花街では、長い節で美しく歌い、たおやかに舞う。杜牧の詩に「百宝もて腰帯をよそほひ、真珠もて臂鞞につなぐ、笑ふ時には花が眼に近づき、舞ひをすれば錦を頭に纏ふ」とあるのは、このことをいうのである。日本の大商人はみんなこれに心を動かされる》（同上）

一八四四年（弘化元年）の夏、ジャヴァのバタヴィアから一隻のオランダ軍艦が長崎に來航した。艦長の名をH・H・T・コープスといい、艦名をバレンバンという。コープスはオランダ国王ウィレム二世から徳川將軍にあてた親書をたずさえていた。これが阿片戦争について通報し、開国をうながした有名な「日本の安危に関する忠告書」である。

植民大臣バウドの副署のあるこの長文の「忠告書」は、阿片戦争の結果、清国人数千人が広東で

戦死し、「且つ政府を奪われ、乱妨さるるのみならず、数百万金を出して焚焼せし財貨を、償うに至」ったことを報じて、次のように述べている。

「貴国も今またかくのごとき災害にかからんとす。およそ災害は倉卒に発るものなり。今よりして日本海に異国船の漂い浮ぶこと、古より多くなりゆきて、これがためにその船兵と貴国の民と容易に争端を開き、終には兵乱を起すにいたらん。これを熟察して深く心を痛ましむ。殿下高明の見ましませば、その災害を避ることを知り給うべし。われもまた安寧の策あらん。（中略）」

《……令書（注・一八四二年―天保十三年―、長崎奉行がオランダ商館長に読み聞かせたものをいう）には異国船を厚遇すべきことを載せて、詳なりといえども、おそらくはいまだ尽さざるところあらんか。その令するところは、ただ難風に遭い、あるいは食物薪水に乏しくして、貴国海浜に漂着する船の処置をいうのみ。もし厚誼を顕わす心に出で、あるいは他のいわれありて、貴国の海浜に来る船を処置することをいわず。もしこれらの船を暴味に追払わば、かならず争端を啓くべし。およそ争端は兵乱を起し、兵乱は国の衰廃を招く。二百余年来、わが国の人、貴国に在留するの恩恵を謝せんがために、貴国をしてこの災害を免れしめんこと、わが希うところなり。古賢の言にいわく、無難ならんと欲せば危険に臨むことなかれ。平穩ならんと欲せば紛冗をいたすことなかれ。

《謹みて古今の時勢を通考するに、天下の民は速かに相親しむ者にして、その相親しむ勢は人力のよく防ぐところにあらず。蒸気船（勝海舟『海軍歴史』版の原注・火氣を用いて風向きにかかわらず、自由に進退する船、スチームボートという。一八〇七年―文化四年丁卯―に創造するという）を発見せし以来、各国相距ること遠きも、なお近国にことならず。かくのごとく各国好を通じるの時にあたって、独

り国を鎖して万国に相親しまざるは人の惡むところなり。……こいねがわくは幸福なる日本国をして、兵乱のために衰廢せざらしめんがために、異国人を嚴禁するの法を弛めよ。これ全く誠意に出ずるところにして、自国の利を謀るにあらず。およそ平和は、ただねんごろに好を通ずるにあり。ねんごろに好を通ずるは交易にあることを、叡智をもって熟慮せられんことを願う。(後略)》

この「忠告書」は、長崎奉行伊沢美作守政義を通じてただちに江戸に送られたが、回答はなかなかおこなわれず、その間にコープス艦長のパレンバン号は、長崎港内に碇泊していたずらに日を過ぎざるを得なかった。しかし、この軍艦の滞在が長崎の人々にあたえた心理的な効果は少くなかった。コープスは、オランダ商館長と長崎奉行を通じて幕府に海軍創設の必要を説き、文化五年夏の不名誉を挽回しようとひそかに期するところのあった若い佐賀藩主鍋島直正や地役人たちも、進んでパレンバン号の見学に出かけたりしたからである。

だが、十月にはいってようやく江戸からもたらされた返事は、ある意味では日本外交の特徴ですでに遺憾なくあらわしていたといってもよい。つまりそれは「追って回答する」という通達であった。十月中旬、パレンバン号はむなく抜錨し、バタヴィアに向って去って行った。

公式の回答書が、長崎のオランダ商館長に伝達されたのは、翌一八四五年(弘化二年)夏になってからである。幕府の当局者が、鎖国という基本政策維持の可能性について、長時間の討議を重ねていたことは疑う余地がない。しかし、その結果として得られたのは現状維持、すなわち通商は許可するがオランダ政府と幕府とのあいだの交信すら謝絶する、という結論であった。

この回答書に連署している阿部伊勢守正弘以下四人の閣老は、おそらくウィルヘルム二世の「忠告

書」のうちの、「……蒸氣船^{スチームボート}を発見せし以来、各国相距^{へだた}ること遠きも、なお近国にことならず……」
という一行を看過するか、その真意を充分つかめずにいたにちがいない。ここにこそ幕府の、二百年来の基本政策変更を迫る最大の要因が隠されていたはずであるが、まだそのことに気づいている者はいなかった。そしてさらに七年という歳月が流れた。

旧暦六月の長崎の市街は、祇園会でにぎわう。いうまでもなくこれは、出来鍛冶屋町の八坂神社の祭礼である。神社への道筋には櫛^{きし}を立て、注連^{しゆめ}をはり、仮小屋の夜店が出て、ことに十五日の祭の当日には、群衆にまじって遊客が丸山の遊女をともなつて浮かれ出、女の好みの小間物を望むまに買ってあたえたりする華やかな光景が展開される。見世物や芝居小屋の盛況については、記すまでもない。

一八二七年（文政十年）から一八三〇年（天保元年）まで、オランダ商館長を勤めたG・F・メイランは書いている。

《祇園の神すなわち商売の神の祭は六月七日から十七日まで十日間続く。ちょうどわがオランダで、仮小屋が建って、ありとあらゆる種類の商品が売りに出され、また天幕が建って、芝居や見世物が行われるあの定期市のようなものである。この祭に付きものの楽しみに富くじを引くこともその一つに数えられる》（『日本』）

一八五二年（嘉永五年）の旧暦六月二十三日、祇園会のにぎわいがようやく去り、市街の東南にそびえる英彦山麓^{ひこ}の愛宕神社の宵宮がおこなわれるという日に、長崎の人々はオランダの国旗を掲げ、

黒い煙を吐きながら入港して来る三本マストの目新しい船を見た。

これこそウィルレム二世の親書にあった「蒸気船」である。ファビウス中佐の指揮するこのスーミング号には、新任の商館長ヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルチウスが乗っていた。彼はしかし通例の商館長ではなかった。パタヴィア総督の特命により、幕府に第二の「忠告書」を提示するという重大な任務を帯びていたからである。その「忠告書」には、この年の一月、アメリカ合衆国が水師提督マシュー・カルブレイス・ペリーを東インド艦隊司令長官兼遣日特派大使に任命したこと、ペリーの来日は遠からずおこなわれるであろうことが記されていた。

スーミング艦上のドンケル・クルチウスは、あちこちの山肌が耕された高い山に囲まれて、まるで大きな壟のように見える長崎の港に強い印象を受けたにちがいない。彼より十年後にこの港を訪れた一英国婦人は、長崎入港の印象を次のように描いている。

《……長崎に通ずる長湾または入江は長さ約四マイル、幅は広い所でやっと一マイルほどである。長崎はかつて私が見た内で、最も美しい港であろう。それは、無数のエメラルドの島をもつシンガポールをも凌ぐように思われる。ここには、エメラルド島の代りに高くそそり立つ断崖があって、森林地の美景をみおろせるし、峰々は青々とした裾山から湧き出たごとくに峻立している》（アンナ・ド・アルメイダ『一婦人のマニラ日本訪問記』）

その「峰々」のうち、市街の東北から東南につらなるのが日見峠である。本河内町から峻しい峠をこえて日見村にいたり、矢上を経て諫早にいたる九州街道は、長崎から江戸に通じる唯一の陸路を形成していた。ドンケル・クルチウスのもたらした第二の「忠告書」は、この峠をこえ、飛脚に

よって幕閣に届けられた。この街道と密接な関係を持っていたのは当然佐賀藩であり、筑後河口の早津江から船で諫早に着き、矢上から日見峠をこえて長崎にはいるという一日半の行程が、佐賀から長崎へ急ぐ旅人のたどる道であった。

一方、市街の東南を扼するもう一つの峠は田上峠と呼ばれる。この峠越しに茂木港にいたる茂木街道は、島原・天草を経て海上はるかに薩摩に通じていた。薩摩から長崎へ向う旅人は、船で茂木港に着き、田上峠をこえて東南から西浜ノ町の薩摩屋敷にはいるのである。さらに茂木街道沿いには薩摩藩の別邸があり、おそらくはこの雄藩の長崎における策源地になっていた。

「蒸気船」スームピング号に乗って、ドンケル・クルチウスが長崎に着任してからおよそ四ヵ月後の嘉永五年（一八五二）旧暦十月十五日、薩摩国鹿児島（もろたか）の鍛冶屋町で、一人の男の子が生れた。父は藩の右筆（ゆうひつ）を勤める山本五百助盛珉で、当年五十歳、母常（つね）は三十六歳の遅い子で、第六男である。山本権兵衛と命名されたこの赤ん坊は、もちろんこのとき長崎でドンケル・クルチウスが、幕府の反応に失意を噛みしめていることなど少しも知らずに、ただ無心に乳を吸っていた。